



Data

監督・脚本：佐藤慶紀

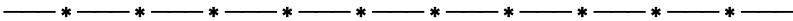
出演：西山諒／西山由希宏／荒川泰次郎／岩井七世／野沢聡／箱木宏美／木引優子／西田麻耶

👁️👁️ みどころ

我が娘を、事もあるうにその夫孝司に殺害された母親の晴美。そんな母親と死刑囚との対話とは・・・？そんな本作は、佐藤慶紀監督が加害者と和解しようとする被害者遺族がいることを知ったところから誕生した。

「裁判モノ」としての出来はイマイチだが、その問題意識の追及やよし！2人の「対話」に絡む晴美の夫、晴美の弟、孝司の弁護士、孝司の母親との「対話」もしっかりフォローしながら、問題点をつきつめたい。

ラストの余韻はそれなりのものだが、ラスト直前のドタバタ劇(?)をあなたはどう評価？これを見てると、問題意識は良しだが、演出はイマイチ・・・。



■□■「裁判モノ」として必見！■□■

私は1975年生まれの佐藤慶紀監督については何も知らなかったが、『名作映画には「生きるヒント」がいっぱい』（河出書房新社、2010年）や『名作映画から学ぶ裁判員制度』（河出書房新社、2010年）の著者である弁護士兼映画評論家の私としては、「大切な娘を殺した犯人と、被害者の母親の対話」というテーマで大胆な問題提起をした同監督の本作は必見！

本作は、大阪では近々シネ・ヌーヴォで公開されるだけだが、2016年釜山国際映画祭をはじめ各国の映画祭で絶賛されたい。そこで、公開前に試写用のDVDを鑑賞。

■□■監督の問題意識やよし！その演出は？成否は？■□■

プレスシートにおける、佐藤慶紀監督の「監督ステートメント」の問題意識は次の通り

なので、それをそのまま引用しておく。その問題意識はすばらしい。しかし、本作に見るその演出は？そして、成否は・・・？

【監督ステートメント】

10年ほど前、テレビ番組企画用のリサーチを行っている時、加害者と和解しようとする被害者遺族の方々が世界にはいることを知りました。中には、加害者の死刑を止めようとする人々もいました。理由を調べると、宗教、思想・信条的理由から、そのような決断をする人々がいました。しかし、中にはそれらの価値観とは関係なく、行動している方もいました。このことに対して、個人的にとても気になったので、関連資料などを調べ続けてきました。

その中で感じたのは、「決して分かり合えないものにどう応えるのか？」ということです。自分の愛する人を殺害した人間のことは、決して理解できないでしょう。復讐心もわいてくると思います。その中で、上記のような決断をするとはどういうことなのか、いわゆる「和解」や「赦し」という概念に頼らず、自分自身で深く考えてみたいと思い、映画として制作することにしました。

いま世界を見回してみても、異文化や宗教、主義・主張の対立など、相手のことを全く理解できないことがあります。分かり合えるはずだと思うから対立が起きるのか、分かりあえないからこそ対話を続ける必要があるのか、理解できないものは、単純に排除すればよいのか、

理解できないものに対してどうするのか、そしてその先に待っている死刑という制度とは何か、皆さんと一緒に考えたいと思いこの映画を作りました。

■□ストーリーの骨格は？■□

プレスシートで紹介されている本作のストーリーの骨格は次の通りなので、これもそのまま引用しておく。この紹介のとおり、本作のメインは、「HER（みちよの）MOTHER」＝晴美（西山諒）と、娘を殺した死刑囚＝孝司（荒川泰次郎）との「対話」（対決）。そして、そこに、①晴美の夫（西山由希宏）、②晴美の弟（野沢聡）、③孝司の女性弁護士、④孝司の母親との「対話」（対決）を絡ませながらストーリーが進展していく。

裁判員制度が導入された後、第一審での死刑判決が増えながら控訴審でそれが無期懲役に減刑される問題点が近時指摘されているが、本作はその論点とはまったく無縁。ただ、娘を殺した死刑囚と、殺された娘の母親との「対話」に焦点を絞った問題提起作だ。そのストーリー展開に私は十分な成熟性を認めることはできないが、上述したストーリーの骨格だけでなく、各シークエンスでの対話を中心としたストーリーの進行をしっかりと追っていきたい。

【ストーリー】

『娘を殺害した加害者の死刑を止めようとする母。一体なぜ…』

43歳のビジネスウーマン・晴美。2年前に1人娘のみちよが嫁ぎ、現在は夫と2人で平凡に暮らしている。そんなある日、みちよが婿（むこ）の孝司に殺されてしまう。孝司は死刑判決を受ける。当初は死刑判決を当然の事と考えていた晴美だが、ある時から孝司の死刑を止めようと考え始める。そこには、晴美しか知らないみちよのある秘密があった。

■□■「裁判モノ」としての疑問点あれこれ■□■

「裁判モノ」映画には、洋画では『アラバマ物語』（62年）や『アミスタッド』（97年）（『シネマルーム1』43頁参照）等の名作がある。また邦画では、『疑惑』（82年）（『シネマルーム10』33頁参照）、『事件』（78年）（『シネマルーム10』52頁参照）、『それでもボクはやってない』（06年）（『シネマルーム14』74頁参照）、さらに、『ゆれる』（06年）（『シネマルーム14』88頁参照）等の名作があるが、死刑を争う殺人事件をテーマにした「裁判モノ」では、証人尋問はもちろん、冒頭手続きから論告、弁論、求刑に至る法廷シーンをリアルに描き、その道の専門家を納得させるレベルのものにする必要がある。「2時間モノ」のテレビドラマの「法廷モノ」では時々その点が不十分でいい加減なものが目立つが、さて本作は・・・？

本作はリアルな法廷シーンをほとんど登場させていないから、その分アラが目立たないが、映画冒頭、バッジも付けていない検察官がいきなり死刑を求刑するシーンにはアレレ・・・？こりゃいくら何でも大きな疑問だ。また、殺人事件では量刑を巡って殺人の動機が問題とされるケースが多いが、婚姻中の夫孝司が妻のみちよ（岩井七世）を殺した本件では、せっかくみちよが妊娠していたのに孝司に知らせないまま勝手に中絶したことで孝司が悲しんでいたことが1つの問題とされた。しかして、法廷でのその動機の解明は・・・？

さらに、弁護側は、「みちよは保険金目当てで夫を殺害しようとしていた」、「その記録はみちよの携帯メールに残っている」と主張していたから、みちよの携帯が重要な物証となったはず。ところが本作では、それが法廷に提出されないまま、みちよの母親である竹内晴美がずっと隠し持っていたというストーリーになっているから、その点もアレレ。こりゃどう考えても大きな問題だ。また、この点についての弁護側の反論が立証できなくても、中絶問題が殺人の動機の1つになっていたことが立証できれば、本件で死刑や無期懲役がありえないのは常識だ。また前述した中絶問題についての弁護側の追及如何では、うまくいけば執行猶予の可能性もあったのでは？さらに、最高裁の死刑の量刑基準からしても、被害者が1人の本件で死刑判決が下される可能性は少ないはずだ。「裁判モノ」の本作には、そんな、あれこれの疑問点が！

■□■死刑判決から6年。夫の変化にビックリ！■□■

本作は本格的な「法廷モノ」ではなく、「娘を殺した死刑囚との対話」というサブタイトルのとおり、殺人犯で死刑囚となった田中孝司と、孝司の手で娘のみちよを殺された母親竹内晴美との対話、その対話の中でもとりわけ「赦し」をテーマとした映画だ。したがって、殺人事件をめぐる第一審の法廷模様はほとんど描かれず、死刑判決が出され孝司が上告している6年後から、そのテーマに沿ったストーリーが進んでいくことになる。

「俺は、みちよがあんな男と結婚することにもともと反対だったんだ。なのにお前が・・・」、
「あなただって、最後は賛成したんでしょ！」。そんな言い争いをしている亡きみちよの両親の姿を見ていると、裁判の行方だけでなく2人の夫婦仲も心配になったが、案の定、6年後の今2人は離婚し別居しているらしい。もっとも、この夫婦が住んでいた家は晴美が両親から相続したものであったため、晴美が家に残り、夫が出て行ったらしい。夫は久しぶりに再会した晴美に対して、「中古のマンションを買った。俺と一緒に生活しないか?」、「俺が悪かった、晴美の気持を尊重すべきだった。」と語ったが、それって一体ナニ?さらに彼は、「孝司君から手紙がきているだろう。」と質問したり、「面会に行った。孝司君は変わった。」等の言葉が次々とその口から出てきたから、更にアレレ・・・。

夫がこのように変化したのは、喫茶店の中で夫を見守っている宗教団体らしき友人たちの影響のようだが、「誰にでも誤ちはある。仕方なかったんだ。」、「憎しみは憎しみしか生み出さない。その連鎖を断ち切らないと。」といういかにもクレイゴト的な言葉は、ホントの気持ち・・・?

晴美は別れた夫とそんな会話を交わしたことによって、封を切らないままにしていた孝司の手紙を開けてみると、そこには・・・?

■□■晴美と孝司の対話は?謝罪はいいから真相を!■□■

本作のハイライトは、目下死刑判決を受け、上告中の孝司と「HER (=みちよ) MOTHER」たる晴美との短い面会時間内の会話になる。1度目の面会で、晴美は「収容者との関係」の欄に「義理の母親」と書いたが、それは一体なぜ?また、孝司は面会に来てくれた晴美に対して、「本日は来てくれてありがとう。ずっと謝罪したいと思っていた。」、「これで私はいつでも死ねます。」と語ったが、それってホントの気持ち・・・?そんな晴美が、2度目の面会では「被害者の母」と記入し直したのは一体なぜ?さらに、「私の母に、私の代わりにみちよの墓参りに行かせたい。許してくれるか?」と質問する孝司に対して、「どうしてそんなことが言えるのか!」と怒りをぶつけ、さらに、「なぜ殺したのか?質問に答えてくれ!」と詰問したのは一体なぜ?

さらに、孝司の母親がみちよの墓参りに来ていた時に、「私の責任です。私の育て方がまずかったです。」との言葉と共に、「お願いがあります。死刑を取り消すための上申書を書いて下さい。私の命を差し上げるから書いて下さい。あの子がこんなことをするとは、今も信じられない。」と頼まれたことを受けた3度目の面会で、晴美は「なぜ母親に上申書を書いてくれと頼んだのか」と孝司を詰問したが、これはなぜ?上申書の件は、最高裁で新たに孝司の弁護人となった女性弁護士が孝司の母に頼んだらしい。そのため、この弁護士がわざわざ晴美の家まで謝罪に来たから、それにて一件落着くと思っていると、そこで晴美は逆に「上申書を書きます」と回答したから、さらにアレレ・・・。

■□■夫が変なら、晴美の弟もかなり変！■□■

本作では、晴美の夫が第一審の裁判で「極刑を求めます。極刑とは死刑のことです。」と証言していたのに、その後、何らかの宗教団体に入ったことで大きく考え方を変えていく姿が描かれる。しかし、私にはどうも彼の言っていることが変としか思えない。晴美とは離婚したのだから、晴美が孝司死刑囚とどう向き合おうと関係ないはずだが、精神的苦痛から立ち直れない晴美に対して「俺たちは話し合うこともできないのか?」、「俺もお前を助けたいんだ。」等とお節介(?)を焼くのは一体なぜ?しかも、彼の心が孝司を赦すことで救われたのならそれはそれでいいが、その後の展開をみているとそれも怪しそう。こりゃ一体ナニ・・・?

他方、本作には1人娘のみちよを殺されて大きな痛手を負った晴美の家を何度も訪れ、さかんに(精神)病院行きや投薬を勧める弟が登場するが、これもかなり変な奴。彼は親の土地建物を晴美一人が相続したことに不満があるようで、晴美が離婚したのを契機に自分たち家族がその家で住みたいようだが、本作に登場する「姉弟ゲンカ」には、かなり違和感がある。

さらに、晴美が上申書を書いたにもかかわらず、孝司の上告が棄却され死刑が確定すると、今度は、晴美が弁護士の勧めに応じてテレビ局の取材を受けてテレビに登場するのも変なら、それを更に詰問する弟も変。そこで弟は「なぜテレビなんかに出るのか、病院に行こう!いつまでもここに住んでいられると迷惑なんだ。姉ちゃんのせいで、妻も嫌な思いをしている。」等と述べて無理やり晴美を精神病院に連れていこうとするから、これまた変だ。本作では、こんな変な夫や変な弟の動きや言動に注目し、それをどう解釈するのかをしっかりと考えたい。

■□■死刑確定後の波紋は如何に?晴美は?夫は?■□■

私が本作を観てはじめて知ったのは、死刑が確定すると死刑囚に面会できるのは親族に限られるため、被害者の母親である晴美は孝司に面会できないこと。もっとも、晴美がそれを孝司の弁護士の聞くと、拘置所の所長は例外を認める権限があるとのことなので、何度もしつこく面会を求めて拘置所に通っていると、ある日一度だけOKの回答が……。また、晴美が弁護士から得た情報によると、死刑判決確定後に法務大臣が交代したが、法務大臣の任期を終えるタイミングでよく死刑が執行されるらしい。すると、孝司の死刑執行が近々ありうるの・・・?また、弁護士の紹介で「死刑より無期懲役を望むか?」、「被害者の親族へのサポートが不十分だと思っているか?」等の問題意識でテレビ局の取材を受けた晴美は、出演したテレビ番組で一体何をどのように語ったの?

他方、孝司を赦すことによって心の平穏を得ていたかにみえた晴美の夫は、「敵を愛し、みんなで祈りましょう!」との趣旨が徹底している某宗教団体の討論会に出席し、「死刑は

かわいそう。和解の道が閉ざされる。」等と話し合っていたが、その中で突然キレてしまい、主催者に対して「偽善者め！」と食ってかかったからビックリ。アレレ、彼の本音は一体どちらにあるの？孝司を赦したんじゃないの？それとも、彼は今でも孝司の死刑を望んでいるの・・・？

さらに、晴美が最初に面会した時には「これで私はいつでも死ぬます」と語っていた孝司は、死刑が確定した今、被害者の母として面会に来た晴美に対して、自分への死刑執行についてどう語るの？私にはこの最後の「対話」はすれ違いばかりだと感じざるをえなかったが、さてあなたの見方は・・・？

■このドタバタ劇(?)の是非をどう考える?■

晴美の家(土地、建物)をめぐるトラブルは、晴美とその弟との間だけの問題だと思っていたが、ラスト近くのドタバタ劇に向けては、別れた夫が1人で家の鍵を開けて入っていくのでアレレ・・・。彼は一体何をしようとしているの？他方、晴美の弟は家のこと、精神病院のこと、投薬のことをしつこく晴美に迫り、食事の席に心理カウンセラーを同席させる始末。これには晴美もプッチンとキレてしまったが、そんな3人がたまたま晴美の家で遭遇したから、さあ大変だ。

晴美の夫の主張は、「お前は一体何を考えているんだ？今度は法務大臣に上申書を書くのか？おかしくないか？娘が殺されたんだぞ！」というもの。その挙句に、「これ以上やるなら、お前も殺して俺も死ぬ！」と叫び、包丁を持ち出してきたからビックリ。そこに孝司の弟が「姉ちゃんは病気だ。病院へ行く!」、「なぜあいつを赦すんだ？」と割って入ったから、事態はさらにややこしいことに。そして、そんなやりとりの中での晴美の発言は「赦すつもりはない!でも、殺すのは間違っている!」、「みちよを愛している。でも私には彼が必要。私の気持を一番わかっているのは彼だ」というものだったから、夫は晴美に包丁をつきつけながら「今の発言を取り消せ!それでも母親か!」とさらに激怒。本作ラストは、そんなものすごいドタバタ劇になっていく。さらに、そこに孝司の死刑が執行されたとのニュースが入ってくると・・・。さあ、このドタバタ劇はどんな結末を迎えるの？

「被害者の母と死刑囚との対話」とは別の舞台で展開される、この3人のドタバタ劇をどう評価すべきかについても、本作ではしっかり考えたい。

■余韻を残す(思わせぶりな?)ラストシーンに注目!■

映画は作りものだから、どんなシーンでも設定が可能。広い東京でタクシーに乗っている時、偶然知り合いの姿を見つかることはまずありえないが、本作ではタクシーに乗っていた晴美が偶然孝司の母の姿を見つけてタクシーを降りるシーンが登場する。そこで孝司の母の口から発せられた言葉は、「孝司は死んではいけない!」、「なぜもっと早く携帯を出さなかったの!なぜ隠していたの!」というもの。つまり、孝司の母は、孝司の刑を

軽くするための重要な物的証拠であった、みちよの携帯を晴美が隠し持っていたことをずっと知っていたわけだ。これまでそれをずっと言わなかった孝司の母は、孝司の死刑が執行された今となつては、その思いのたけを晴美にぶちまけることに……。しかして、それに対する晴美の回答は？

孝司の死刑執行が終わった今となつては、孝司と被害者の母たる晴美との対話はありえないが、本作ラストで交わされる、そんな被害者の母と死刑囚の母との対話に注目したい。しかして、2人の対話はこれがラスト？それとも、これからも続くの？そんな余韻を残す本作のラストに注目！

2017（平成29）年8月21日記